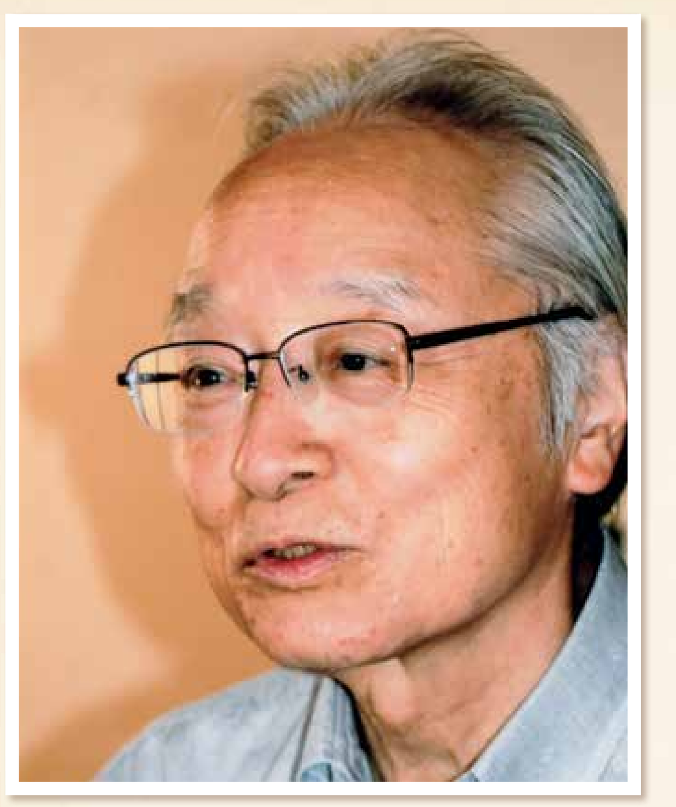
恩師を訪ねて

澤田洋一先生


1976年4月から1983年3月まで在職

　浜松市で生まれ育ち、浜松北高校から京都大学文学部を卒業、韮山高校勤務を経て、1976年に本校に着任した。クラス担任のほか、山岳部の顧問として黒法師岳・大無間山など南アルプス深南部のハードな山々を生徒を率いて踏破。当時の住まいは五十海の教員住宅で、そこにはサッカー部の長池実監督ご一家もいた。

　しかし澤田先生といえば、ふらりと風のように教室に現れ、起立・礼の号令もなく始まる、アカデミックな香りのする授業ではないだろうか。口には出さずとも澤田節のファンは多かったはずだ。ちなみに当時の「古典Ｉ乙」の教科書は、絶対受験に出ない「閑吟集」「春風馬堤曲」等が採録されており、遊び心満載だった。

「とにかく自由だったよね。居心地がよかった。永久に東高にいたいと思ったくらいだ」

　当時の学校新聞の先生方へのアンケートに「先生は自信を持って教えているか」という質問があり、「あるわけがない」と答えたところ、「一人だけ自信のない教師がいた」と紙上で批判されたそうだ。

「あの頃から40年たって、知識も経験もそれなりに積んだはずの今でも授業は『水物』。いつどこで、誰にどんな風に影響を与えているかわからないし、そういう意味では今でも自信はないよね」

「でも、知識・経験・自信があろうがなかろうが、結局なんとかなるというのが教師という職業なんじゃないかな。それは生徒が自分でなんとかしてくれるから。当時の東高生も自立していた」

　淡々と、飄々と語られる味わい深い言葉。某高在職中、「スナフキン」と呼ばれていたというのも頷ける。生徒と教師の、大人としての程よい距離感がそこにはあった。

　本校勤務の後は、島田高・上海外国語大学での日本語教師・掛川西高・磐田西高・浜松北高勤務を経て退職。昨年は本校、今年は浜松北高で非常勤講師、さらに中国人・イギリス人に日本語を教え、各種文学講座で「源氏物語」「枕草子」「徒然草」等を講ずる多忙な日々。それを支えるのが、早朝目覚めると書斎に直行(奥様談)という勉強ぶりだ。50歳になってから本格的に始めたという合唱も、コンサート出演を控えている。

「まあ、仕事が道楽かな」

「大変だから面白いんだよ。楽だったら面白くない」

　澤田ワールド、ますますオーラ全開だ。藤枝市高柳在住。70歳。

（会報委員にして不肖の教え子・Ｋ）

人生の転機は人との出会い

浜松医科大学
外科学第一講座
病院教授
船井　和仁
（61回・昭和63年卒）

　母校である藤枝東高校から同窓会報の原稿依頼を頂き身に余る光栄です。昭和63年卒61回生の船井です。現在は浜松医科大学外科学第一講座で病院教授として呼吸器外科の診療（手術、外来、入院）と医学部生の教育、医学研究に日々追われています。外科医ですので仕事の中心は手術です。現在の肺がん手術は低侵襲化が進み、胸腔鏡というカメラを胸の中に入れモニターを見ながら細い道具を用いて肺を切除する胸腔鏡下手術が主流です。今年４月からは呼吸器外科分野でもロボット支援手術が保険収載されました。da Vinciというロボットを使い、術者は高精細な３Ｄハイビジョン画像を見ながら関節のある自由度の高い鉗子を操り高精度の手術が可能になりました。我々は保険収載に先立ち昨年７月から臨床試験としてロボット支援手術を導入し、今月発表された呼吸器外科学会が認定するロボット支援手術プロクター（全国で10人）に私も選ばれました。またここ数年、毎年10月には藤枝東高校で大学模擬講義として肺がん治療について講義を行っています。

　高校時代は親元を離れて下宿していました。特に勉強をしたわけでもなく、特別なにかに熱中したわけでもなく日々は過ぎていきました。そのため大学入試は不合格で、浪人生活を経て浜松医科大学医学部に入学しました。田舎の茶農家の長男が医学部を目指したのも人との出会いがきっかけですし、外科医になり呼吸器外科を専攻したのも大学の部活の先輩方の影響があります。もちろん日本人の死亡原因トップであるがんの中でも死亡者数が最も多い肺がんを治してやろうという大きな野望もありますが。

　呼吸器外科医として手術をしながら肺がん治療を行っていくのが自分の人生だと思っていた40歳の春（２０１０年）、外科学第一講座に新教授が赴任し呼吸器外科責任者として私が大学に戻ることになりました。この教授との出会いが人生の大きな転機になりました。大学で臨床だけでなく学生の教育まで行うようになった事、胸腔鏡手術を導入した事、更にロボット支援手術を導入しプロクターになった事など、自分の意思や能力とは別の次元で人との出会いやタイミングで人生が決まってきた気がします。

　来年で50歳、人生50年の戦国時代なら終焉ですが、外科医としてはこれから円熟の技術を駆使する一番良い時期を迎えます。胸腔鏡やロボット手術の技術で肺がんを治すことを目標に、藤枝東高卒の誇りを胸に静岡県の医療の礎を支え続ける覚悟です。

随想

同窓という名のご印籠

清水埠頭㈱
常務取締役
向島　克彦
（37回・昭和39年卒）

　39年卒母校の応援団員いまだ健在なり。「枝高健児、覇気あるか」「オー」この三連呼、次に「ちーせー」と応援団員が叫ぶ。母校入学で1年生が最初に恐怖の洗礼を受けるのが、学校行事でもある当時の「応援練習」であった。

　小生が応援団1年の時には、剣道の竹刀を持っていた先輩もいたことで、整列をしている下級生は、練習が終了するまで緊張の連続であったと思う。この応援練習によって母校の校歌をはじめ応援歌(第一・第二・第三)を覚えることになったのである。「第1応援歌、異議あるか」「異議なし」。異議ありとは言えない状況がそこにある。

　さて、何故?小生が応援団に参加したのか。話せば長くなるので、出来る限り手短にしよう。サッカー部を早期に退部したことが根底にある。退部後、小生の恩師であるK先生よりアドバイス「応援団に入ればサッカーの試合についていける」。これには即座に同調した。お陰様で、全国連覇をこの目で見ることができたのである。

　小生の後輩(1~2年)によく言われる。「先輩が応援練習のとき、横にいるとホッとしました。一番優しかった」と。応援団失格か?しかし、同窓の志が集まる席では、70代に入っても応援エールを指名されることが多い。積極的にではないが、断れないのであろう?同窓の志が出たところで次に進もう。

　さて、先輩といわれると逆らえないのは何故か?現在の会社に入社した。研修最初の事業部の課長が、「君、藤枝東か。サッカー部に入れ」。母校のサッカー部OB（キーパー）であるとのことで、否応なく入部した。

　次に、新規事業担当で新しい上司が来た。「君、藤枝東高出身だね。俺の事業を手伝え」。このほうも先輩であった。まだある・・

　清水に藤志会という藤枝東の同窓会があった。「お前、必ず出席しろ」。満を持して出席した。会長はサッカー部OBの北川さんである。「向島、お前たち（たまたま同じクラス出身が3名いた）、幹事(大先輩の松澤さんである)を手伝え」と来たのである。これが同窓会なるものに引きずり込まれた出発点であった。

　その後、静岡市との合併を機に、静岡支部・西川前支部長から「支部に合流しないか」とのお誘いがあり、「副支部長をやれ」で現在に至っている。

　これ、全て同窓の先輩方の「この印籠が目に入らぬか」に従ってきているのである。しかしながら、ここに小生が成長する糧があったのは言うまでもない。「たかが同窓と言うなかれ、されど同窓なのである」。

「枝高健児、覇気あるか・・・オー」

グアテマラの手仕事から

office SABASABA
代表
實石　知之
（66回・平成5年卒）

　グアテマラの手仕事から世界を変えていこうと思います。「AIやIoTではなく、グアテマラの手仕事から?」と思うかもしれませんが、グアテマラの手仕事からビジネスを通じ、少しずつ、世界をより良い方向へ変えていけたらと思っています。

　高校時代のサッカー少年がグアテマラの手仕事に辿り着くまでのエピソードも面白いかもしれませんが、紙面が限られているので別の機会に。では、実際にどの様に世界を変えるのか?それはグアテマラの「手仕事」「食」「旅」を掛け合わせた「手仕事×食×旅」により、多様で自然環境に配慮した手仕事で新たなモノ・コトの価値を生み出し、私達の日常をより豊かに彩ることで世界を変えていきます。大手広告代理店を退職し「手仕事×食×旅」で世界を変えるべくSABASABAを設立したのが6年前。

　現在は、その第一歩としてグアテマラはマヤの先住民族と共に手織物、手編み物による手仕事製品をグアテマラと日本を行き来しながら製作。出来上がった製品は主に地元静岡と東京で展開しています。9月からは、クラウドファンディングで募った資金を基にグアテマラの手仕事の拠点創りに着手。天然染めの復興を皮切りに、次世代に繋がる新しい手仕事によるモノ・コト作りに挑みます。と同時に、次なるステップとして、「食」も掛け合わせていきます。

　グアテマラはスペシャリティーコーヒーの産地であり、カカオの原産地。嗜好品として世界的需要が高まるコーヒーとカカオを手掛けることで、高品質で手間がかかる丁寧な手仕事を支え、育みます。更に「手仕事」「食」が息づく拠点に「旅」を掛け合わせ、人々が出会うことで、お互いの理解を深め、尊重し、お金やモノだけでなく、人や価値を循環させる。そして、グアテマラで培った「手仕事×食×旅」の仕組みを世界に広げ、世界の日常を豊かに彩っていきます。

　言うは易く行うは難しですが、第一歩の「手仕事」は徐々に評価を高め、イメージに近づきつつあります。次の「食」に結びつけば実現に向けて大きく前進。今後の「グアテマラの手仕事から」の挑戦、奮闘振りを是非、お楽しみください。10月から秋冬の新商品の展示販売がスタートします。今年は地元静岡、新潟、東京に出展。詳細はSNSで随時ご案内致しますので、お気軽に遊びにいらしてください。グアテマラの手仕事、SABASABAの挑戦を直に体感頂けたら望外の喜びです。

人工芝整備プロジェクト

静岡新聞社・
静岡放送営業局
加島　奈保子
（71回・平成10年卒）

　私が3年の冬、サッカー部が「古豪復活」で13年ぶりに選手権に出場し、ベスト4まで勝ち進んだ。放課後に同級生の横断幕を作り、入試を控えながらも準決勝の国立競技場へ足を運んだことを思い出す。

　昨年秋、私の上司2人の元へ副担でもあったサッカー部の服部康雄元監督が訪ねてきた。上司2人とは東高同級生。2009年に完成した東高人工芝グラウンドの傷みが想定以上に早く、早急な張り替えが必要だと言う。整備には5千万円近くが必要だが、急な張り替えのため予算が厳しく、寄付金集めに苦労していた。

　私は入社以来、新聞やテレビ、ラジオの広告やイベントの仕事をしてきたが、当時は社長室で新規事業に関わっていた。そして、上司と服部先生から、「クラウドファンディング（アイデア賛同者からのサイトを通じた資金集め）」による人工芝整備支援という課題を与えられた。仕事の枠を超え、サッカー部後援会・OB会代行としてプロジェクト運営を手伝うこととなった。

　サイトのページを作成したり、返礼品を考えたり、人工芝整備実行委員会に参加したりと準備を進める中で、同窓会やサッカー部後援会・OB会の先輩方、服部先生の教え子であるサッカー部OB、Jリーグで活躍する選手、学校関係者などさまざまな方と出会った。先輩から後輩へと息づく東高サッカー部の歴史を実感すると同時に、サッカー部を支えるそれぞれの熱い思いを知った。

　クラウドファンディング「藤枝東高の人工芝整備プロジェクト~サッカー王国復活へ~」は12月末にスタートした。3月10日の終了までに目標の1千万円に到達しなければ1円も手にできない。多くの協力をいただきながらも、終了1週間前の時点でまだ6百万円。悲観視する声もあったが、最後の最後まで東高OBのパワーを信じて拡散を続けた。結果、最後の数日で圧巻の伸びを見せ、461名・1151万3千円の支援で達成することができた。他の寄付金集めも順調に進んで7月下旬にいよいよグラウンド整備が始まり、9月下旬には完成予定である。

　今回、本プロジェクトでお世話になった大先輩の依頼を断れず、僭越にも寄稿させていただいた。ご協力いただいた皆さんに改めて感謝を申し上げると共に、東高サッカーという絆を、脈々と引き継いでくれるであろう現役生にエールを送りたい。

　そして、微力ながら地域メディアを担う一人としても、母校を見守っていきたいと思う。

世界に目を向けて

ピアニスト・指揮者
The Liszt Society International Piano Competiton（英国、2017）優勝
鈴木　啓資
（83回・平成22年卒）

　この度、同窓会報への寄稿の機会をいただきましたこと、大変嬉しく思っております。私が高校を卒業したのが2010年のことですので、ご活躍されている先輩方からしましたら、まだまだ駆け出しの身ではありますが、近況報告をさせていただきます。

　私の高校時代を思い出すと、多くを学ぶことのできた期間だったと思います。挙げ始めれば際限がありませんが、その時に得たことは、その後の私の人生に生かされていると強く感じます。

　私は高校卒業後、東京音楽大学ピアノ演奏家コースに進み、音楽の道を歩み始めました。ピアノは8~9歳頃から習っていましたが、音楽の道は頭になく、高校では理系クラスに在籍し、工学系の道に進みたいと考えておりました。そのような中での大きな方向転換でしたので、ここで音楽を選ぶのであれば絶対に妥協しない、と決意した記憶があります。

　高校時代に先生方から、「世界に目を向けよ」というお言葉をよく頂いていたと記憶しておりますが、まさに私の大学入学以降の行動は常に世界に目を向けたものとなりました。大学3年次に大学代表の交換留学生として、フィンランドのシベリウス音楽院に短期留学をしました。大学卒業後はすぐにハンガリーへ渡りました。ハンガリーではリスト音楽院に在籍し、昨夏にピアノ修士課程を終えて帰国したところです。現在は再び東京音楽大学に戻り、博士課程に在籍して、ハンガリー留学で学んだことを活かしながら、ハンガリー人作曲家のエルネー・ドホナーニの研究をしております。

　さて、高校時代に学んだことと音楽がどのように結びつくのか疑問に思われる方もいらっしゃるかもしれませんが、私は幾度となく、藤枝東高校で学んでいて良かったと思うことがありました。音楽とはいっても、根本的な部分は理系の世界ですし、なにより他の世界と同様に、音楽だけできていれば良いというものではありません。一つのことに特化するということも大切ではありますが、一つしかできないということと、いくつもの選択肢の中から一つに特化するということは全く意味が違います。そのような意味で、自分のベースとなる部分を高校で身につけることができたと思います。そして何よりも、「世界に目を向ける」ということを意識づけていただいたことは私にとって非常に大きなことだったと思います。これからも世界に目を向け、精進しなければならないと感じ、身が引き締まる思いで過ごす毎日です。

第三応援歌誕生のお話

教頭　**山本　剛史**

　藤枝東高生徒会が発行する生徒会誌は『誠』です。編集は『誠』編集委員会が担当します。平成30年春発行の『誠』は第62号、長い歴史を刻んでいます。遡って62年前の昭和32年7月、記念すべき第1号すなわち創刊号が産声をあげています。この創刊号、図書館司書室の書庫に1冊所蔵されています。司書先生のお許しを得て特別にお借りしました。読み進めますと11ページには、昭和31年度前期生徒会の主な運営方針が二点掲げられていて、一つは「生徒会組織の改革」、そして、もう一つが「第三応援歌の作成」とありました。

　東高には校歌とは別に、三つの応援歌があります。現在生徒たちが携行している生徒手帳にもこれら四つが掲載されています。現在、校歌(石山脩平作詞・佐々木英作曲)については節目の式典（始業式等）で必ず歌唱していますが、応援歌を歌うことはありません。また、三つの応援歌のいずれにも作詞・作曲者の記載は見られません。

『誠』創刊号

　さて、『誠』創刊号をさらに読み進めますと12ページ以降には「前期生徒会重要事項記録」が記されており、その6／19付記事には「全生徒の要望により新しい応援歌の作成が始まった」とあります。その後約半年間、応援歌に関する記事は見当たりませんが、活動記録最終日となる10／13日付の記事中に「第三応援歌ができた。作詞は33Hの竹田猛夫君、作曲は本校音楽部によった。」の一文に行き当たりました。当然といえば当然ながら、第三応援歌には作詞者がおられたのです。

　竹田さんは現在千葉県にお住まいです。以下は、竹田さんにお電話にて伺った第三応援歌誕生に纏わるお話です。

「私は中学の頃から日記や詩を書くのが好きで、東高でも日々のこと、思い描いたことなどを文にしたためるのが習慣になっていました。部活動は新聞部に所属していました。そんな私ですので第三応援歌作詞のお話があった時には、わが意を得たりと喜んでお引き受けし、様々に思いを巡らせながら作詞をして提出したと記憶しています。私の歌詞は、当時生徒会を担当しておられた斯波正義先生が手を入れてくださり、結果、二番の歌詞については自分が書いたものとは少し様子が変わっています。一番と三番はほぼ自分が書いたものです。各番のくり返しのフレーズは私の作詞そのままでです。私が最も気に入っているのは三番の歌詞です。菊の葉をあしらった気高い校旗のもとで学んだ自分たち東高生が、これからの時代を作っていくのだという気概を歌い上げています。“我等がかいな（腕）に栄えあれ“です。それから、この第三応援歌の作曲者ですが、以前同級会で話題になったことがありました。創刊号にもあるように、当時の音楽部の中で器楽に所属していた誰かなのではないかと思うのですが、誰なのかは残念ながらわかりません。」

　竹田さんは当時のことをはっきりと記憶されていて、とても丁寧に第三応援歌誕生について教えてくださいました。竹田さんのご指摘の通り創刊号54ページ、「音楽部の活動報告」の中に当時音楽部に所属していた部員名が掲載されており、内「器楽」に所属する部員9人の名前を確認することができました。この中のどなたかなのでしょうか。それとも…。もしも第三応援歌の作曲者について情報をお持ちの方、同窓会事務局までお寄せいただけたら幸いです。

　最後に、作詞者の竹田さんに敬意と感謝の意を表し、第三応援歌を掲載させていただきます。

第三応援歌

一、松の並木をゆく風も
　響け我等の歌声に
　ああ伝統の輝くところ
　千南原に栄えあれ
　千南原に栄えあれ

二、あせをぬぐえば白雲が
　大志を持てと呼びかける
　我が青春のみなぎる力
　藤枝東に栄えあれ
　藤枝東に栄えあれ

三、誇りは高く菊の葉の
　香る深紅の旗のもと
　永久に花咲き未来を創る
　我等がかいなに栄えあれ
　我等がかいなに栄えあれ

作詞　竹田猛夫（第30回卒）
作曲　昭和31年当時音楽部員

平成29年度維持費（同窓会費）の卒業回別納入金額

　維持費の納入金額が年々減少しています。

　下記内容を参照され卒業回別の横のつながりを強化していただき一人でも多くの方が会費納入にご協力くださるようお願い申し上げます。

参考；30回卒（昭和39年）40回卒（昭和42年）50回卒（昭和52年）
60回卒（昭和62年）70回卒（平成9年）

回	金額	回	金額	回	金額	回	金額	回	金額
1回	0	20回	4,000	39回	180,000	58回	36,000	77回	6,000
2回	0	21回	8,000	40回	148,000	59回	42,000	78回	20,000
3回	0	22回	36,000	41回	93,000	60回	18,000	79回	14,000
4回	0	23回	26,000	42回	94,000	61回	24,000	80回	6,000
5回	2,000	24回	19,000	43回	170,000	62回	26,000	81回	10,000
6回	0	25回	30,000	44回	70,000	63回	17,000	82回	14,000
7回	0	26回	53,000	45回	46,000	64回	31,000	83回	22,000
8回	0	27回	52,000	46回	44,000	65回	16,000	84回	12,000
9回	0	28回	75,000	47回	90,000	66回	16,000	85回	34,000
10回	2,000	29回	90,500	48回	52,000	67回	10,000	86回	6,000
11回	10,000	30回	64,000	49回	64,000	68回	10,000	87回	12,000
12回	2,000	31回	65,000	50回	28,000	69回	11,000	88回	4,000
13回	2,000	32回	68,000	51回	44,000	70回	10,000	89回	10,000
14回	10,000	33回	82,000	52回	60,000	71回	27,000		
15回	10,000	34回	76,000	53回	24,000	72回	4,000	合計	3,037,500
16回	2,000	35回	106,000	54回	42,000	73回	2,000		
17回	8,000	36回	91,000	55回	30,000	74回	10,000		
18回	17,000	37回	62,000	56回	43,000	75回	8,000		
19回	2,000	38回	91,000	57回	48,000	76回	14,000		

H30年３月